

The Gallery voice

NO-58

編集・発行 / 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄南風原町神里 373 TEL / FAX(098)888-6117 / 2014.7.12
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

翻弄される島—ウチナー・OKINAWA

新垣 安雄

作品制作を続けて 50 年になろうとしている。20 代で中部の読谷高校に美術教師として赴任したが、南部出身の私には驚きで、生活感覚が 180 度転換した思いだった。ベトナム戦争激化で目にしたのは米軍基地内の高く積まれた軍需物資、戦車、軍用トラック、等であった。更に米軍基地には近代兵器のミサイル基地、レーダー基地、戦闘機、それに伴う爆音、パラシュート降下訓練とベトナム戦争補給基地であるがゆえの風景であった。迷彩色の「物」が私の造形の原点になったと思う。そして作品は状況へのアプローチを元にして、真摯に自分の感情や意志をメッセージとして届ける事でした。

米軍人による事件・事故の絶えない島も戦後 70 年になろうとし、復帰して 40 年にもなった。島民要求の本土並み復帰は米軍基地と自衛隊の配備ありきで、生活の様相は植民地状態の差別島でしかない。また、新たな基地建設を巡り島は激しく揺さぶりが続けられている。歴史に翻弄され続け、島の意志がゆがめられ不条理の中で暮らしている。私は沖縄に生きる人間として差別を許さず、戦争を許さず、新たな基地建設を許さず、平和で豊かな人間の生活を営む中から作品を創作したいのです。

しかし、新たな基地建設を知事が容認し、保守系国会議員も容認した。与那国島に自衛隊配備も決まり、日本政府のアメとムチで島はますます混迷の度を増すことだろう。また、安部首相が特定秘密保護法や、集団的自衛権の行使容認にむけ、憲法解釈を成し、九条の持つ尊厳さをなし崩しにしようとしている。国民不在の舵取りに成りかねない恐ろしい案件である。

沖縄は 70 年前に地上戦を経て 20 万余の尊い人命を失った。悲惨な経験と戦後の歩みは辛苦の毎日だった。あの恐ろしい戦雲が再来しようとしているのか。島は「命ど宝」を教訓として得た。私はそれらの現実から眼を背けず真実を見極め、正しくあるべき社会と人間の魂を育む事が大切だと思います。

ところで、私がどの様な状況で社会と向いて制作し

たかを復帰前後からの概略を記して、あるべき造形と島の行方を考えてみたい。

1968 年に屋良朝苗氏が主席公選で誕生し、復帰が佐藤、ニクソン会談で 72 年返還が決まった。私は日常生活の中に米軍基地があるのだと考え、与儀公園に米軍のシンボルである星マークを野戦用テントに押し野外展を企画したが、市の許可は得たものの米民政府の許可が下りず、予定の日にと与儀公園で座り込みの抗議をした。

1972 年、27 年間植民地状態の沖縄が 5 月に復帰を控えていたが、しかし、納得できる様な事ではなかった。私は様々な闘争の場となった行政第二庁舎広場で不条理な島の状況を思考する野外展を開いた。



「幻想のオブジェ」展 1974年 インスタレーション (A)画廊

1975 年、戦後 30 年を問う野外展だったが、その前年には米軍の不発弾爆発により 4 人死亡、34 人負傷という事故が起きた。また、75 年は海洋博覧会も開かれ、本土の人による土地の買い占め、開発による破壊行為等

に島は硝煙の消えない複雑な歴史の中にあるのだと「オキナワの痕」を立体で展示した。

1979年から85年は政治も文化もヤマトとの系列化が進み、沖縄らしい空気が薄れていた。私は白の方形を「白のオブジェ」展、「存在と意識のオブジェ」展、「形象のオブジェ」展として、復帰10年をはさんで閉塞感が漂う沖縄の状況を原点にした空間造形で基地の重圧やヤマト化への言葉に表せない心の葛藤を自分らしさを求めて展示した。

1986年は学校教育に「日の丸、君が代」を卒業式、入学式に揚げ歌えと現場は混乱した。そして87年には海邦国体が沖縄で開かれ一層のヤマト化が強要された。沖縄戦で灰燼と化し、ヤマトに復帰で裏切られ、アメリカに虐げられた沖縄人は混迷状況にあった。私は琉球松の年輪に出逢い強くたくましい姿を発見し、それを素材にウチナーンチュのより処としての「根神」を制作して展示し、思念のふんざりがついた。

1993年から95年にかけては、復帰20年を経た島のあり方を模索し、また戦後50年を数える状況から戦争の風化への危機として「風化への抗」展を、そして尚不発弾や戦争遺品等が数多く見つかる島の忘れてはいけない悲惨な教訓として「50年の対象」展を、また「負の遺産と今」展を発掘された戦時中の遺品(軍靴、葉ピン、砲弾の破片、鉄カブト等)と反戦平和の願いを込めた作品とのコラボレーションで展示した。

1997年と98年は96年の普天間飛行場の全面返還合意により、名護市辺野古の海に新たな基地建設をと、市民や県民を愚弄する沖縄への政府の姿勢は「生贄の島」としか写らない。名護市民はアメとムチで拮抗状態にあった。「拮抗」「拮抗から」で制作展示した。

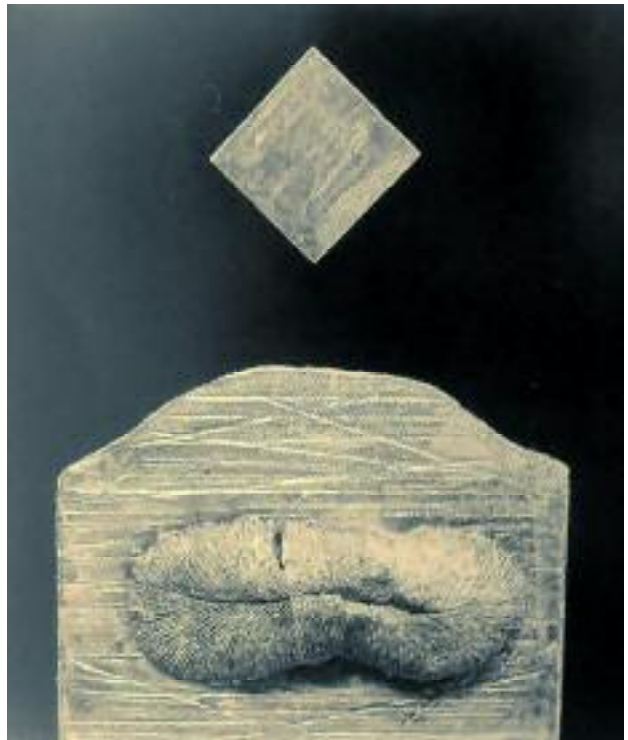
2000年、21世紀を迎えた。平和で豊かな島、心穏やかな歌と踊りの島と言いたいのだが、観光の島と生活する島とは乖離状態にあった。私は「島シリーズ」として2000年に「基地燃える島から」展02年に復帰後30年たった島でも揺れているのだと「揺れる島」展、04年に「困窮」展を開いた。その年は展覧会の最中に沖縄国際大学に米海兵隊の大型輸送ヘリが墜落し、正に困窮の島になった。

2006年、戦世から61年島の歩みはアメリカ世からヤマト世へ、これでもかと島は翻弄され続けている。辺野古にはV滑走路をと米軍は言ってきた。「歴史に翻弄される OKINAWA」展、07年 極東最大の基地嘉手納飛行場に最新鋭のステルス戦闘機 F22 が飛来した。復帰した

とはいえ、変わらぬ沖縄「復帰 35 年 OKINAWA」展として展示した。

2008年 20万人余の尊い人命を奪った沖縄戦、とりわけ日本軍による住民虐殺や壕追い出し、集団自決死等で死に追いやられた島民は歴史上の共通認識であった。しかし、歴史教科書の書き換え要求が行われた。悲惨でむごたらしくとも凄惨な体験は正しい証言として記録し、伝えられなければいけない。「歴史の証言」展として制作、また10年には「島からの証言」展として展示した。

2012年は 復帰 40 年になる歴史に翻弄され続ける島の状況は変わらない。米軍の事件、事故、オスプレイ配備、自衛隊の P A C 3 配備等々と沖縄差別は続くのだろうか。私の思いは漆黒へと変わり「漆黒の島」展となった。



「世乞い12」(部分) 2014年 ミクストメディア

2014年 戦後70年もなろうとしている沖縄は、戦後の米軍による統治に始まり、日本復帰以降もなお国土の0.6%の沖縄に在日米軍が73.8%が集中して存在する現在、およそまともな社会では起こりえない事件、事故が今なお相次いで起こっているのが現状である。辺野古への新たな基地建設を計画することは、日本政府の構造的差別であり、米国の軍事的植民地状態であると言わざるをえない。

私はこの様な時に、今こそ平和と命の尊厳、人権と環境保護の理念を持ち、2013年の「漆黒の島」から「世乞い」する島へと思念し制作展示した。

(あらかき やすお / 美術家)

世や直れ

高良 勉

新垣安雄は、1967年の第一回個展「胎動のオブジェ展」から今日まで28回の個展を開いてきた。そして、今回は画廊沖縄主催で造形活動50年のダイジェスト展が開催される。私は、新垣作品群を80年代の「白のオブジェ展」以来本格的に見るようになった。そして、個展批評も「弾丸と珊瑚」をはじめ数回以上書いてきた。（詳細は拙著『魂振り 琉球文化・芸術論』を参照）。

そこで、今回は作家論を中心にして新垣安雄の作品と思想について論じてみたい。新垣安雄は、自他とも認める前衛造形作家である。私は、安雄作品の前衛性と思想性を4方向のベクトルとして考えてみた。

一つは、素材やオブジェへのこだわりと造形化である。このベクトルは、初期から今日まで一貫して伸びている。軍靴、薬莢、鉄兜、水筒等々のモノたちが、安雄の表現意識の比喩や象徴として新たな意味を付与され作品化されていく。近年は、琉球松の根やクサビライシ珊瑚等が素材として加わっている。安雄は、かなり早い時期からミクストメディアの表現方法を試みていたのだ。

第二のベクトルは、展示方法とその思想の造形化である。安雄の造形思想は、タブローの枠からハミ出しているようにする指向性を持っている。したがって、展示方法も会場の壁のみならず会場全体の空間と時間を造形化したり、野外展等を展開してきたのである。

その代表的な個展が、68年の第3回個展「戦後23年の抵抗」野外展であった。今や、戦後美術史の伝説的な野外展となった与儀公園での作品と、抗議の看板と本人の座り込みである。すると、この頃から安雄はすでにインスタレーションの造形表現を展開していたのだ。

そして今日まで、彼は造形思想と展示・表現思想において常に前衛的であろうと試みてきた。奇をてらうのではなく、流行を追うのではなく、その真摯な努力は歳月を積み重ねることによって、その真価が高く評価されるようになってきている。

ここで、第三のベクトルとして抽象作品に向かう新垣の表現意識・思想の特徴について考えてみたい。彼は、初期から今日まで作品のテーマとして常に沖縄社会の歴史と状況に真正面から向き合い、その矛盾を鋭く告発し抵抗しながら、未来へのメッセージを表現してきた。それ故、「社会派の美術家」としても高く評価されてきた。その表現思想の特徴は、個展のタイトルである「存在

と意識のオブジェ」、「風化への抗」、「歴史の証言」、「漆黒の島」等々としてよく現れている。私たちは、これらのタイトルや作品群から安雄の造形思想の根底に流れる沖縄戦の体験や戦後体験から培われた思想の衝撃を感受することができる。

彼は、幼少にして戦争で父親を失い、廃墟の戦後沖縄の飢えと貧困を生き抜いてきた。それらの体験を、あえて象徴的に抽象的な造形作品として表現することによって、根源的な平和への希求と不条理な基地の島への抵抗と克服を訴えている。

新垣の社会・状況への批判と抵抗は、砲弾の破片や鉄兜等の無機物へのこだわりとして激烈に表現されてきた。ところが89年の「根神展」や2000年の「島シリーズ」展から作品の素材に琉球松の根っこや木の幹、珊瑚石等の有機物系が登場してきている。これら「根神」や「世乞い」の表現意識やテーマの方向性を、第四のベクトルと呼んでみる。

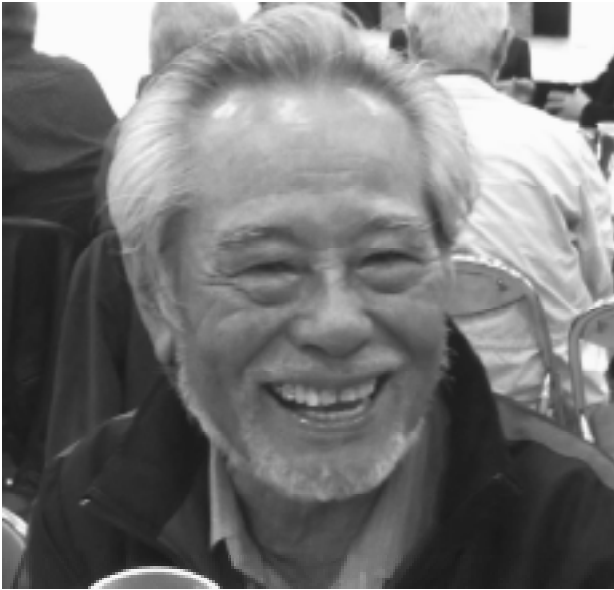


「島シリーズX」 2012年(南風原文化センター)

このベクトルの展開によって、安雄の表現世界はグッと重層性と深さを増している。彼は、不条理な島への批判・抵抗を情況対応に止まらず、自己の体験思想と押し込められている「島の根」から掘り起こし再構築し、未来へのメッセージとして表現し始めたのである。批判・抵抗から「世や直れ」、「世乞い」の祈りへの深化である。

かくて、安雄の四つのベクトルは力線を伸ばし相互に影響し合い、絡み合いながら、「何故今日このような造形表現をするのか」という根源的な創作思想に応えようとする。その挑発力は、ジャンルを超えて私たちを揺さぶり訴えてくる。（詩人・沖縄大学客員教授）

YASUO ARAKAKI



新垣安雄について

新垣安雄作品に初めて接したのは1975年に開かれた与儀公園（那覇市）の野外展であった。まぶしい陽が差す夏の暑い日だったと記憶している。銃弾の跡形が残ったコンクリートの様な塊が公園に散らばっていた。金属製のシルバークレーの塊に食い込んだ兵士の鉄カブトと兵士の靴、銃弾でぶっ飛ばされた跡形。砲弾が目の前で炸裂し、その部分が切り取られたオブジェのような物体。痛々しい姿の作品群が広場を埋め尽くしていた。そのオブジェ群には戦場を想起する死臭や「血」の匂いはほとんど無く、戦後の日常生活の身近なモノたちが、「アイコン」として存在していた。「戦争」と「戦後」そして「現在」をクールに見つめる作家の眼差しが野外インスタレーションとして展開されていた。

大きな鉄の薬莖の並べられた作品を思い出し、雨後の畑や道路、森の中、至る所に錆びた砲弾の破片や大砲の薬莖を見つけ、それらを拾い集め、スクラップ買い取り業者に売って、小遣い稼ぎに夢中だった少年時代を思い浮かべた。爆弾が投下された跡には池のような水たまりが至る所にあった。池底から足裏の感触を頼りに、大きな破片や弾薬が見つかることもしばしばであった。地上戦の激しかった南風原の村々には至る所に激戦の傷跡や不発弾が見られ、村のコンクリート橋や建築物には日常の風景として弾痕があった。

新垣は、戦後の生活の周辺にあるモノや風景を、オブジェに変換し、インスタレーションとして提示した。美術家の脳裏には一体何があったのだろうか。戦争と戦後の厳しい時代を知らない世代には想像が出来ないだろう。新垣は3歳で地上戦を体験し防衛隊へ徴兵された父親は、家族の疎開先（宜野座）に見舞いに来た時、米軍に連行され、どの場所で、どのように死んでいったのか知らない。物心ついた安雄少年は父の声、顔の形の記憶もなく終戦をむかえ

た。父の遺骨の欠けらでも手にしたい、触れたいと探し求める安雄少年の心境が想像される。オブジェとして作品化された「水筒」や「軍靴」は兵士として戦場で散った父親の形見のようにも思えてくる。同時に、蓋が開いた水筒の「水」は亡父や全ての戦場人に向けられた「命の水」として、象徴的で記念碑的な作品となった。

1965年琉球大学美術工芸科を卒業した新垣は、美術教師として読谷高校に赴任。67年、第一回個展（琉球新報ホール）「胎動するオブジェ」を開く、当時の作品は残っていないが沖縄の屋根瓦を並べたり、トタン屋根を銃弾が撃ち込まれた様な作品を提示し、25歳の美術家は戦後も居座る「米軍」を激しく沖縄社会へ問いかけた。更に翌年、野外展の不許可を出した米国民政府に『抗議の座り込みパフォーマンス』を行っている。（現在の若い美術家の社会状況への関心の薄さとは大きな隔たりを感じる。）前述の戦後の遺物をオブジェ化し、自身の立つ足場を探し求めると同時に、「戦争の愚行」を発信し、「軍隊」を糾弾する美術行為であった。50年代に始まった朝鮮戦争、60年代半ばから激しさを増したベトナム戦争、新垣はそれらを視野に入れつつ、プロテスト精神を全面的に、アートと社会性を重視した展示会を連続的に進めてゆく。

72年の野外展「不条理—OKINAWA」（琉球政府前広場）、73年「反戦のオブジェ」展（沖縄タイムスホール）、74年の「幻想のオブジェ」展（A）画廊／那覇）は日の丸の国旗を背に、憤死し散乱した兵士の残像を提示し「皇民化」「軍国主義」を批判する作品を提示した。更に、75年の戦後30年を問う「オキナワの痕」と与儀公園の野外展（前述）は、戦後沖縄美術界のプロテストアートの代表的な野外展となった。これらの一連の作品展は、新垣の渾身の直球を投じた展示会である。沖縄の戦後美術を語る時、その作品群の重要性は大きく、美術家魂の抗いの「杭」として忘れてはならないだろう。

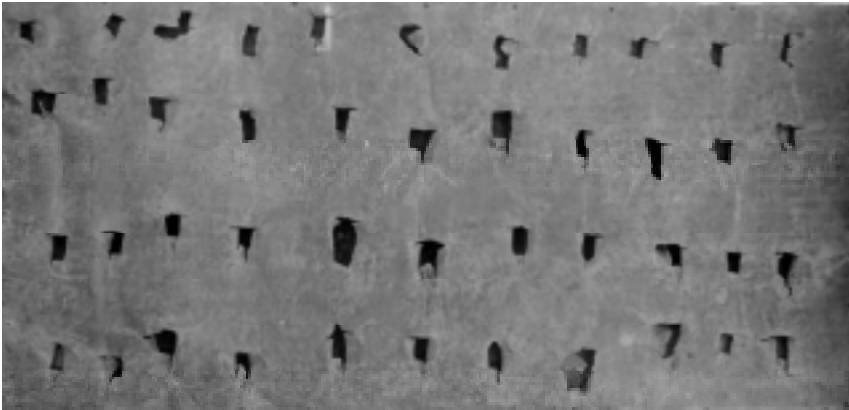
以後、新垣は「76」展（沖縄タイムスホール）のグループ展を最後にオブジェを使ったインスタレーションの表現手法を変えていく。変化が最も現れたのが79年の「白のオブジェ」展である。キャンバスに四角の反立体が数個貼り付けられ、画面の全てが真っ白に塗られたミニマル絵画の作品である。80年代になると「存在と意識のオブジェ」、「形象のオブジェ」と造形の原点に立ち返るが、更に沖縄の「場」と「島」の考察を深化させ「根神」へと展開して行く。そこには常に新垣の「状況と島」への問いかけがある。2000年代になると、未来への希望と憂いが「せぐい」へと変化し、島への愛しい眼差しが展開されてゆく。

今展では、50年に及ぶ活動が生み出した膨大な作品群からダイジェストで「新垣安雄の世界」に触れて頂くことにした。来年は戦後70年をむかえる。県立美術館学芸員の詳しい調査が望まれる。新垣安雄作品が今日の状況にあっても「有効」なことは「不幸」な社会と言わざるを得ない。「時代と状況」「アートと社会」を問う作品として、未来を担う若い人々に伝えたい。（上原誠勇／画廊主）

新垣安雄 (YASUO ARAKAKI) 略歴

- 1942年 沖縄県南風原町生まれ
 1963年 第15回沖展「抵抗」(50号/油彩)入選
 1965年 琉球政府立琉球大学美術工芸科卒業
 第17回沖展入選(わらべシリーズ: 絵画・デザイン・彫刻)
 版画3人展(新垣安雄・普天間敏・志喜屋孝英/那覇琉米文化会館)
 2人展(新垣安雄・儀間朝健/那覇琉米文化会館)
 1967年 第1回個展「胎動のオブジェ」展(琉球新報ホール/2月)
 第2回個展「怒りのオブジェ」展(琉球新報ホール/9月)
 1968年 第3回個展 与儀公園にて野外展を企画するが、米国民政府が不許可同公園にて抗議の座り込みを行う(10月)。
 2人展(新垣安雄・大嶺実清/月光荘画廊/東京)「亜鉛板と鉄条網」出品
 1969年 2人展(新垣安雄・新垣純一)「箱と鉄カブト」出品(1月)
 沖縄現代作家展(デパートリウボウ)「箱と鉄カブト」出品(9月)
 1970年 現代美術作家展(リウボウホール)9出品
 1972年 第4回個展(琉球政府前広場)野外転 不条理OKINAWA (2月)
 1973年 第5回個展「反戦のオブジェ」展(沖縄タイムスホール)(11月)
 1974年 第6回個展「幻想のオブジェ」展(AJ画廊/那覇)
 1975年 第7回個展「戦後30年を問う野外展 『オキナワの痕』(与儀公園/7月)
 1976年 「76展」(新垣安雄・豊平ヨシオ・新垣安之輔・真喜志勉・山城見信・木村朝貞/沖縄タイムスホール)「軍靴の痕」出品
 1979年 第8回個展「白のオブジェ」展(国吉ギャラリー/那覇市)
 1980年 第9回県芸術祭美術展(那覇市民会館)「二つのオブジェ」奨励賞受賞
 1981年 第9回個展「白のオブジェPART2」展(国吉ギャラリー/那覇市)
 3人展(新垣安雄・新垣安之輔・我喜屋秋正/沖縄物産センター画廊)
 1982年 第10回個展「存在と意識のオブジェ」展(県民アートギャラリー/那覇市)
 1985年 第11回個展「形象のオブジェ」展(画廊宝/那覇市)
 1989年 第12回個展「根神」展(ギャラリー1956/那覇市)
 第13回個展「根神PART-2」展(画廊嘉手納/嘉手納町)
 1993年 第14回個展「風化への抗」展(画廊沖縄 Gallery Work-2/那覇市)
 1994年 第15回個展「50年の対象」展(画廊サロン・ドミツ/那覇市)
 1995年 沖縄現代美術家展(主催: 沖縄県/浦添市美術館)
 沖縄の美術家展(主催: 那覇市/那覇市民ギャラリー)
 第16回個展「負の遺産と今」展(南風原文化センター)
 1997年 第17回個展「拮抗」展(画廊サロン・ドミツ/那覇市)
 1998年 「琉球弧 美の渦流」招待作家展出品(リウボウホール/那覇市)
 1998年 第18回個展「拮抗から」展(読谷村美術館)
 1999年 沖縄タイムス芸術選奨奨励賞受賞
 2000年 第19回個展「島シリーズ 基地・燃える島から」(南風原文化センター)
 2002年 第20回個展「島シリーズ 揺れる島」(前島アートセンター/那覇市)
 3人展(新垣安雄・宮城明・仲里安広/読谷村美術館)「島シリーズ」出品
 2003年 2人展(新垣安雄・儀間恒昭/南風原町役場ロビー)
 2004年 第21回個展「島シリーズ 困窮」(南風原文化センター)
 2005年 IMA 05展(新垣安雄・奥原宗典・喜屋武貞男・越戸康弘・宮城明)
 2006年 第22回個展「島シリーズ 歴史に翻弄されるOKINAWA/沖縄」
 (南風原文化センター)
 2007年 「憲法九条の碑」、「鎮魂と平和の鐘」デザイン設置(南風原町)
 第23回個展「島シリーズ 復帰35年OKINAWA」(南風原文化センター)
 2008年 第24回個展「島シリーズ 歴史の証言」(南風原文化センター)
 2009年 「アトミックサンシャイン in 沖縄展」参加(沖縄県立博物館・美術館)
 第25回個展「島シリーズ 一島からの証言」(南風原文化センター)
 「緊急アートアクション2009」展参加出品(ギャラリーマキ/東京)
 2010年 第26回個展「島シリーズ 証言」(南風原文化センター)
 「第9回まつしる現代フェスティバル」参加出品(長野県松代藩文武学校)
 2011年 沖縄タイムス芸術選奨大賞受賞
 「絵画と詩のコラボ越える」(新垣安雄・川満信一・喜久村徳雄・高良勉・)
 (南風原文化センター)
 「IMA 11展」(新垣安雄・奥原宗典・宮城明・新垣安之輔/南風原文化センター)
 2012年 第27回個展「島シリーズ 漆黒の島」(南風原文化センター)
 2014年 第28回個展「世乞い」(南風原文化センター)
 2014年 第29回個展「歴史に翻弄される不条理な島OKINAWA」(画廊沖縄/南風原町)

<新垣安雄 / 参考作品>



「抗議パネル」(86 × 186 cm / 亜鉛板パネル)

1967年の米軍統治時代、公園使用野外展の申請に「不許可」を下した米軍政府に対し、26歳の新垣は抗議のハプニング（公園内で座り込み）、パフォーマンスを決行した「抗議パネル」(86 × 186 cm / 亜鉛板パネル)



1972年2月琉球政府前広場にて野外展「不条理-OKINAWA」を展開。戦後の米軍統治に抗議するインスタレーションアートを展開

1972年（琉球政府前広場）



1972年琉球政府前広場

1975年7月与儀公園にて野外展「戦後30年を問うーオキナワ痕」を展開



1972年与儀公園野外展

1972年日本へ再併合された沖縄、戦後30年も居座る米軍基地の存在（日米安保）に抗議を続ける野外アート展